

平成十八年の新春

あけまして

おめでとうございませす



西栗倉村長 道上 正寿

【ゆっくり】

一昔前の家族団欒の正月を思い出します。兄弟や子供たちが帰省して昔話や村の変わりように花を咲かせた団欒が懐かしく思われます。非常に気ぜわしい時代が続きますが、文明の利便を忘れて「ゆっくり」「もったいない」の元旦を迎えられてはいかがでしょう。

そんななかで郷土西栗倉の良さを再発見して、長い視点で村を誇れる心を育てたいものです。

【改革は歴史要因】

さて村長室の書棚に昭和五十二年発行された「危機の自治体財政」の書簡のくだりの中に「高度成長から低成長へという構造的なシステム転換、深刻な不況、未曾有の財政危機、暗くて長いトンネルの中にある。昭和五十年から三年連続した巨額の財政不足、地方では長い高度成長に慣れた肥満体質、地方財政はいま破綻の危機に直面し、その立て直しが緊急に求められている。教科書的な地方税、地方交付税から国と地方の新しい税源配分、自主税源増強の方向での一般消費税、法人事業税、外形課税・・・さらに水ぶくれ体質の打開のための行政の守備範囲の再検討、受益と負担の直結システム、スクラップ・アンド・ビルト、ゼロからの出発・・・」と続いています。時代背景は石油ショックです。戦後六十年が経過した今、我々は生活の豊かさを享受していますが、地方財政は「どん底時代」といわれた三十年代、国債を初めて発行した四十年

そして上記の五十年代前半、そしてバブル崩壊した平成二〜三年から現在に至る「失われた十年」と好景気と不景気を繰り返して、財政危機に見舞われる度に大きな制度改革が常連化してきました。

【時代感でしようか】

さて繰り返して述べていますが、小泉総理の就任以来「聖域無き構造改革」をスローガンに始まった地方分権の流れから三位一体改革、郵政の民営化、道路特定財源、市町村合併そして年金、医療費、介護、福祉の社会保障改革等すべての分野で住民の痛みを伴い、しかも一人当たりの効率の議論が優先されれば「地域社会は財政的に氷河の時代」に突入します。

確かに郵政解散、郵政選挙後の方向については理解しがたいところも多々ありますが、今回の改革の方向も歴史的な課題ですべてが新しい改革ではありません。そして少子高齢化、グローバルゼーションの進行からすると、国の将来の在り方が同時に提案される「改革」については地域社会自らも「現状のままではいられない」という共通の認識で頑張るしか方法がありません。

【すばらしい生活環境、利便性を生かそう】

西栗倉村は「独立独歩」二年目になります。当然歳入をベースにした持続可能な行財政改革、新しい組織、住民サービスの在り方が緊急の課題ですが、「村づくり」としての将来ビジョンは、市町村合併で中国地方で五村（全国で百余り）になったことを逆手に考えることが必要です。幸いに西栗倉村では道路、上下水、各施設の整備が終わり、保健・福祉・介護・医療の包括的なサービスは県下でも誇れる状況下です。しかも県境の「村」の中に智頭線の駅が二つ、姫鳥道のインターチェンジと全国一の利便性に加えて十八年度には各戸に光ファイバーが整備されて通勤と職業の可能性が無限に広がります。

【やっぱり人づくり】

そこで村をテーマに「村の誇り」「村の清流」「村の道の駅」「村の心産業」「村の学校」「村の環境対策」等すべての面で村だけの「本物」で、「癒し」があつて、「ゆっくりズム」に特化した「住んでみたくなるような西栗倉」の創造での地域の活性化に挑戦すべきでしょう。

すべての事の始まりは全村民の英知の結集と「人が村をつくり、村が人をつくる」を繰り返してお願ひして、新年の挨拶とさせていただきます。

あけまして おめでとうございます



西粟倉村議会議長 青木 秀樹

昨年をふりかえってみますと、政治、経済に於いては大変な変革の年でありました。

とりわけ政治の世界にあつては改革が叫ばれ、市町村合併をはじめ、国と地方のいわゆる三位一体の改革、郵政民営化、特殊法人改革と矢継ぎ早に様々な改革案が示され実施された年でありました。しかし、私たち庶民にとつては改革改革はわかるけれど、一体何をどう改革しようとしているのかという肝心のところが今ひとつ釈然としないままです。ただ言われるままに何か大きな波に乗り、あての無い方向に彷徨い出ているよ

うな不安な気持をを禁じ得ません。景気は回復しているといわれていますが、私たちがかつて経験したような景気の上昇は実感として感じ取れませんし、そればかりか殆んど皆さんが未だ収入減に陥つたままではないでしょうか。また、テレビ、新聞等では毎日のようにショッキングなニュースを見聞きします。全く想像もできない事件が、全国のあちこちで頻りに起こりました。便利で快適な生活を手に入れた結果、予測不可能な危険にいつもさらされなければならぬという現代社会。私たちの選択は本当に間違っていないのでしょうか。

さて、合併問題がまだまだ覚めやらぬという状態です。皆さんも気持ちどう落ち着けたらよいものかと悩んでおられることと思います。今の時期、一番多いご意見、質問がこの問題です。確かに今回の合併は、本質の見えにくい非常に理解しにくい問題です。その原因は、何を基準に判断するかが依然としてはっきりしていないという点と、私たちが向かうべき方向性、そしてそのあるべき将来像が

示されていないということに収斂されるのではないかと思います。ただ一つ言える事は、地方自治とは何のためにあるのかという根本的な意義と、それがどういふ仕組みで成り立っているかということに自覚した上で、この問題に取り組みが必要であるということだと思います。自治の仕組みは、空気のように馴染んでいながら実は本質を忘れてしまいがちです。ご存知のように、地方分権一括法で、市町村、都道府県、国はお互いに役割を分担して住民、国民に尽くす存在となり、その立場は上下関係でなく対等と言うことになりました。「地域住民の福祉の増進を図り、地域における行政を自主的かつ総合的に実施」するのが市町村、それらの成り立ちを見守り、広域から必要なことをして、地域が落ちこぼれないように国との調整を図るのが都道府県ということになっています。つまり、私たちが日常的に暮らす地域で、住んで良かったと実感できるような個性的で自主的な地域づくりをする場として市町村は存在している、と言えるのです。いずれにしても、国民生活の主体は住民にあるということですから、いかに小さな自治体であろうとも、そこに住む住民が自主的にその行政を選択し、運営する覚悟と合意さえあれば臆することは何もない訳です。また、合併は「する」、「しない」

で成功か失敗かが決まる、といううなものではありません。もともと自治の問題です。自治は住民によって築きあげられるものです。したがって、その向かうべき将来像は住民の意思と創意工夫によって変わるものですし、変えていけるものなのです。新年早々、少し堅苦しい話になりましたが、正否は別の問題として合併問題は乗り越えたわけですから、気持ちを切り替えてこのすばらしい西粟倉村を、小さくても「キラリ」と光る個性的な地域として前向きに捉え、誇れる村にしていきたいものです。

さて、西粟倉村議会は現在、定数を8議席として、委員会は総務常任委員会と産業建設委員会の2委員会を設けています。行財政改革、地域活性化、少子化問題と取り組むべき課題が多い中で、それぞれ来年度へ向けて、光ファイバー敷設による情報基盤整備事業、そして西粟倉の将来の自給エネルギーの可能性を模索する新エネルギービジョン策定事業等の調査、検討に入っているとあります。少人数となりましたが、村民の皆さんの付託に応えられますよう精一杯の努力で臨む決意でありますので、何事によらずご意見、ご要望などお気軽にご相談ください。ますますお願いいたします。